【書評】

『角川外来語辞典』を読む

見坊豪紀

一

荒川惣兵衛氏の大著『角川外来語辞典』は待望久しい辞典であった。戦前（昭和十六年）に冨山房から刊行された旧版は、真に画期的な外来語辞書として一世を驚かしたが[1]、著者は前著を大増訂してふたたびそれにもまさる大著を学界に提供した。

昭和十六年版の『外来語辞典』（以下旧版と略称）とこのたびの『角川外来語辞典』（以下新版、本書と略称）とをくらべるとき、まず気のつくことは、新版における量の飛躍的増大である。

新版はB6判で、旧版よりひと回りぐらい大きいだけだが、収容量は旧版にくらべ約三倍にふくらんでいる（表参照）。これは、『言海』が『大言海』へと成長したほどではないかもしれないが、それにも比すべき大飛躍である。

見出し語について言えば、旧版は「語数約1万」（自序）であったのが今回は二万五千語（「凡例」6ページ）にのぼっている。しかも約半数の見出しは戦後近々二十年間に輸入された「新外来語」であるという（「はじめに」3ページ）[2]。

新版・旧版の量的比較

	行数	字詰め	文数 本ページ
旧版	37	29	1073
新版	52	2段×21	1513

著者荒川惣兵衛氏は、英語学者としてよりも、国語研究者にとってはもっぱら外来語の研究者として知られている。じじつ著者は、『日本語となった英語』（自家版。昭和五年）以来、『日本語となった英語・改訂版』（研究社・昭和六年）『外来語辞典』（冨山房昭和十六年）『外来語辞典』（アテネ文庫版）（弘文堂昭和三十年）と、外来語に関する有益な研究をつぎつぎと国語学徒に提示されてきたが、この系統の第五作として本書を刊行された。

（注）

（1）著者は、この労作によって、昭和十六年度岡倉賞を受けている。

（2）二万五千語という数がいかにぼう大であるかということは次の数字から見当がつくだろう。

外来語が集中的に集まりやすい区間「ハ～ハアン」を選び各種

の辞書と比較してみる。結果は次のとおり。

外来語数の比較（ハ～ハアン）

書名	（刊年）	語数
日本外来語辞典	(1915)	36
本書旧版	(1941)	78
棟垣実：外来語辞典	(1966)	175
本書新版	(1967)	224
明解国語辞典	(1952)	41*
広辞苑	(1955)	76**
新版広辞林	(1958)	68
三省堂国語辞典	(1960)	53
新国語辞典	(1963)	64
新潮国語辞典	(1965)	68
新選国語辞典	(1966)	50
講談社国語辞典	(1966)	53
三省堂新国語中辞典	(1967)	80

* 用例の形で出ているものはかぞえない（以下同じ）。

** 人名・地名はかぞえない（以下同じ）。本書にないから。

類書でも最大、国語辞書の三倍ないし五倍という数字である。この密度で国語辞書を編むとすれば、見出し四十万は無いとつりあわないような気がする。

二

まず本書の内容を、凡例（はんれい）その他にしたがって紹介しよう。

本書における「外来語とは

(1) 古今の外来語プロパーと

(2) 漢字音を訓とした語、すなわち漢字音でありながら、やまとことばと思われがちな、いわばかくれた外来語を含む。」（「はじめに」3ページ）

また収録語の時代については「最新の流行語はもちろん、古語・廃語も採録する。」（同上ページ）

「本辞典に収録した語はすべてわが国のなにかの文献、あるいはそれに類するもの（広告や放送など）にあらわれたものに限られている。」（「凡例」6ページ）と著者は述べているが、このことは《すべての見出しが、実際の使用例から採集されたものであって、新語辞典・流行語辞典などからの間接採集をまったく含まない》と解してよいかどうか、じつはすこしはっきりしない。引用文献のまったくない見出しもあるし（後述参照）、新語辞典、専門語辞典などしか引用されていない見出しもあるようである。しかし、これらの見出しもすべて著者にとっては既知の語なのであろう。

収録語の「分野は各般にわたるが、なかでも衣食住・娯楽・スポーツ・セックスなど万人の生活に関係ある語は徹底的に網羅した。」（「凡例」6ページ）ところに、本書の内容上の主要な特色を認めるべきもののようであり、この方針は一般読者にとって利用価値を高からしめるであろう。

見出し語の中には、固有名詞、「イニシアル語」（acronym のこと。朝日新聞社『新聞語辞典』では「ローマ字略語」と呼ぶ）、商標名なども一定の規準のもとに豊富に収められている。このほか、日本語のなかに往往見られ（クラクション、コンセントなど）、特に最近ふえてきた（ファンタジック、メータク、ラブロマンスなど）へんな外来語や、風俗史的に興味のある語（ドドンパ、パンパニズムなど）に至るまで、著者の若若しい好奇心と強烈な探求心は、日本語の中における外来語の実態を無遠慮に、かくす所なく読者に突きつけるのである。驚嘆のほかはない。しかしながら、著者の目にふれたすべての外来語が収録されているのでないことは無論

であって、その採択の規準を著者は「大衆性のあるもの、オーソリティのもの」においている（同上ページ）。だから、本書にあがっていないからといって、ただちに著者の目にふれなかったと言うことはもちろん誤りである。あれがあってこれがないとか、あれを入れるならこれも入れてほしいという小さな希望は、しょせんこのような大著力作にとっては、本質的にはどうでもよいことと言えようが、ぱらぱらめくりながら連想をほしいままにすると、「アルプススタンド」「口コミ」「ツモ（自摸）」「ムーディック」「ラテン化」「ラテン文字」など、いくつか思い浮かぶものもある。「パートタイム」があるなら「フルタイム」もほしいとか、「テンパイ」があるなら「やみテン」もとか、「チーメッツァン」があるなら「チュエンジャー」（chief engineer）「チュオッサー」（chief officer）もとか、ついでに思い出す語もあるのだが、そのへんはすべて考慮ずみなのであろう。

さて外来語辞書の生命たるべき原語については特に詳細を極め、ばあいによって、同形の原語を、英・独・仏など各国語にわたっていくつか並記してある。これは著者のいわゆる「原語多元説」（「凡例」7ページ）のあらわれであるが、この点についてはあとでふれる。なお、外来語と原語、語源の三者あるいは二者の間に著しく意味の相違のあるときは、必要に応じて語源の説明をあげてあるのは親切である。

意味の記述の詳密と、引用文献の豊富と、引用文の長大とは本書の最大特色であろう。著者がもっとも苦心し努力を払ったのはこの点にあると思われる。語そのものに関しては、事物の発明・発見・輸入・伝来などの日付けを記入するよう心がけ、引用に関しては「古今のおもしろい、または教訓的な読み物を提供」し、語釈などの典拠を明らかにすることを目ざしている（「凡例」8ページ）。

たとえばコーヒー飲用の歴史を『園芸大辞典』からの実に二十五行にわたる引用によって語るなど、紙数を惜しまぬていねいさは、じつに重宝でありがたい。引用文の数も「コーヒー」のところでは磯野信春『長崎土産』（一六一五）から井上誠『珈琲物語』（一九六一）に至る三十七種の文献名（用例つき）をあげている、といったぐあいである。[1]

そうじて、引用文献の形で典拠を明らかにするという方針は顕著なように思われ、しばしば各種の辞書・規則書等が引かれることもそれを証明しているように思われる。

語釈についてはあとでもふれるので、平凡な語の意外に多義的であることの一例をここに引いて、著者の目の周到性と用意の深さの一証拠にしたい。

パンやき【ポルト pão＋焼き】①《製造の時は 英 baking. 食前には 英 toasting》パンを焼くこと. ②《英 baker》製造の時, パンを焼く人. ¶麵包師傅（パンやき）」丸善『百科全書（中）』1884 ③食前にパンを焼く道具. ▷トースター.

複合居体言にはよく「こと」「ひと」「もの」の三義が生じるのであるが（たとえば「粉ひき」）、著者はそのことを意外な語を借りて明らかにしたばかりでなく、国語辞書（たとえば『広辞苑』）にも和英辞書（たとえば勝俣詮吉郎『新和英大辞典』）にもない新見出しを辞書のために追加してくれた。

（注）

（1）その文献のなかには「コーヒーは関西ではコーヒ」新村出『外来語の話』（一九四四）というのも含まれている。余談ながら、コーヒーの見出しが

コーヒ（ー）

となって、長い形、短い形の両方をあげているのは、著者が関西の語形に親しんでいることの現われと見られる。関東の人間なら「コーヒ」の形はせいぜい引用文献の記述に任せるのではあるまいか、と興味深く思った。

三

外来語辞書の批評に関しては、ふつうの国語辞書のそれとはちがって、特殊な困難がある。日本語のわく外への批評とわく内への批評と、二つの領域がありうるからである。この二つの領域は、外来語辞書のばあいはよけて通るわけにはいかない。が残念ながら私は日本語のわく外の領域、たとえば原語の国籍、語形などについて批評する能力を持たない。ここでは、外国語が借用語の形で日本語のわくの中に取りこまれてからあとのことに限定して、この大著をいくつかの狭い観点からながめることとしよう。

まず、外国語が日本語のわくの中に取りこまれ、日本語の世界に定着し、変化発展（？）し、最後に（時として）消え失せるまでの過程に着目して観点を設けるならば

1　外国語が日本語の中へ取り入れられるさいにこうむる変容
2　音韻的変容の結果生じる語形
3　品詞、意味などのずれ・発展
4　使用場面・環境

などがあげられる。

また、日本語一般について共通語と方言、書きことばと話しことば、古語と現代語というような区別を考えるとき、外来語についても同様に

1　共通外来語と方言外来語
2　書きことば（としての）外来語と話しことば（としての）外来語
3　古典外来語と現代外来語

のような区別を考えることが可能であろう。

『角川外来語辞典』には右のように層分けされた外来語のどれがどのように収録解説されているか、ということも批評の一つの観点となりうる。

また、本書が辞典であることからして、知識の確認ないし学習のためにだけ使える本か、情報源ないしは資料としても活用できるものか、という観点もありうる。

ここでは、私自身の好みにかたよることをあえて恐れず、現代外来語の状況がどのように扱われ、どのようにこの辞書に反映しているか、本書の資料的価値はどの程度であるか、国語辞書の世界から本書をながめたときにどんな点が目につくか、というあたりに重点をおいてながめてみようと思う。そのさい、旧版にくらべて新版がどの程度成長・発展したかにも目をそそいでゆきたい。

外国語が借用語として日本語のわくの中に取りこまれるときに、音韻・文法・構文・意味などいろいろの面で変容が起こる。たとえ

ば音韻的な変容によって、同じ原語から二個の（ばあいによっては数個の）類似語形が発生し、これが外来語辞典編集者にとっては基本的な悩みの種となるはずである。が、類似語形の問題は、見出しの語形の段階で考えることができるので（後述）、ここでは、いわゆる和製英語の取りあつかいについて吟味してみたい。

ここにサラリーマンということばがある。国語辞書の中にはこれを「和製英語」とするものがある。外来語辞書の中にはこれの原語を salary man とするものがある。

本書には「和製語」の区別が設けられている（「凡例」12ページ）。和製語とは和製外来語の略称で、和製外来語とは和製英語、和製フランス語等々の総称と理解する。

今私が例示した「サラリーマン」はどうかと見ると【俗 salaried man】となっている。これは著者の言う和製語の取り扱いではない。和製語ならば【俗 salary+man】となるはずである。英語 salaried man が外来語化したときに変容をこうむって「サラリーマン」となった、とする解釈にもとづくのではあるまいか。（楳垣実『外来語辞典』の

↑俗 salaried man

も同じ趣旨であろうと解せられる）

このような、変容によって生じた外来語はほかにも同類が多いはずで、「バイヤステープ」（↑biased tape）「バルカンファイバー」（↑vulcanized fiber）オフシーズン（↑off the season）などいろいろある。「スムース／スムーズ」などの混用も、「ス／ズ」の区別が日本語では文法的に意味を持たないところから生じた現象である。

著者が和製英語の概念を拡大して「和製語」なる類概念を作り出したこと、和製英語と変容（された）英語とを区別したことに賛意を表し、「サラリーマン」等の原語の取り扱いを旧版よりも前進させたことに敬意を表する。

四

辞書のあるべき編集法は、まず広くなまの用例を採集することから始まる。著者は外来語の分野で、理想に近い広範な採集を行なった。「わが古今の文献2―3万巻、300万ページ以上をけみし」「あつめた外来語数約6―7万、引用約100万以上」（旧版、自序）という数字は正に空前であり、個人の業としてはおそらく絶後であろう。これに戦後の追加採集がくわわる。戦後の採集数については書中に記載がないけれども、平均一見出しにつきほぼ一例の割で用例がついている。これはあくまでも平均である。用例のまったくない見出し（「アミルアルコール」「カンタービレ」「カンタル〔電熱線材料〕」など）、旧版時代の用例にとどまる見出し（「ペキンダック」「ヘクタール」「ペクチン」など）などもあるのでばらつきがある。なかには、戦後の引用ばかりを六個も持つ見出しもある（「バースデーケーキ」はその一例）。

引用は、著者も力説されるように本書の生命であり（「凡例」8ページ）、本書は国語研究者にとっても最高無上の宝庫というべきである。

引用に関して新版と旧版をくらべてみると、

1　新版は、旧版での引用を引きついだほかに、戦後の文献から多数引用している。(1)

2　旧版では、引用のない見出しは絶無に近かった。新版ではまれがある。それはおおむね新版で追加された見出しで、その使用分野は、物理・化学・医学・薬学など自然科学に関するものが多い。

3　旧版では passim（〔引用書の〕諸所に、の意）という示し方が往往見られた。たとえば

バックハンド〔E backhand〕1【庭】～〔無谷一弥：テニス passim.〕(2)

このような示し方は、新版にはほとんどない。

4　旧版には日付けのない出典名が往往あった。新版での戦後の引用にはすべて日付けがはいっているようである。このことから、新版の用例中、日付けのない文献は、おおむね戦前出版のそれであると推定して大過がない。

うれしいことに、旧版で日付けのなかった出典が、新版では日付け入りであがっていることがある（「パースニップ」の引用『蔬菜の研究』一九二五年はその例）。しかし逆に、体裁上の統一のためか、用例の所在ページが新版では一切はぶかれてしまった。凡例でそのことにふれてあるとは言え、ちょっと残念な気がした。

5　戦後の引用についての最大の特色は、新聞・雑誌の利用がひじょうに多いことである。引用の面からみた本書の最大の特色と言ってよい。

著者の居住地の関係であろう、新聞には『中日』を筆頭に、『毎日』『大朝』などが見られる。まれに『アカハタ』からの引用もあり、次の用例は価値ある用例である。

パンフ　パンフレットの略。¶「パンフ」『アカハタ』1954. 7.15

旧版では、新聞・雑誌からの引用はほとんどなかった。

6　戦後の引用の日付けをながめると、大部分は昭和二十五年から後のものである（最新の日付けは昭和三十九年らしい）。戦後もっとも用語がゆれ動いた昭和二十～二十四年の状況が空白となったのは、著者が回想しているように「10人の家族が餓死をまぬがれるため、life ではなく、living の生活と戦わねばならなかった」（「はじめに」3ページ）からであり、この空白をだれよりも残念に思うのは著者その人であろう。

7　旧版には、おもな引用書の一覧表があったが新版はまったく無い。かなわぬ願いながら、すべての書名が刊行年・出版社名入りでまとめられたらどんなに便利なことか。旧版時代、私はおもでない小説類の日付けがわからなくて、何度ももどかしい思いをした。

引用例をながめることはそれだけでも楽しい。とくに、戦後発生したとばかり思っていることばに戦前の文献が引かれていたりすると、ぎょっとする。「インフォーメーション」（報道・報知の意味の）に大正三年の、「ジャー」に昭和十五年の、「タイミング」に昭和九年の、「バイバイ」に昭和十年の、「レクリエーション」に明治十七年（！）の文献を見いだすとき、それだけで深い興味をそそられる。

しかし、引用例を研究の手がかりとするためには、読者はそこで満足してはならない。

リンネルと同義の「リンネン」についての引用書を見ると最初の文献は次のとおりである。

「棉服（もめんもの）＝linnengoed（リンネングード）」箕作阮甫『改正増補蛮語箋（上）』1848/～

事情は一見明瞭であるかのようであるが、原物にあたってみると、引用だけではわからなかったいろいろの含蓄が引き出されるのに気がつく。すなわち同書巻一27丁裏に、前記の引用例が

棉服（モメンモノ）　*linnengoed*（リンネン。グード）

と出ている。『蛮語箋』は分類体の日蘭対訳辞書であることを念頭においてながめるとき、「リンネン」はオランダ語そのもの、すなわち「棉服」に対する原語の資格で出ていることがはっきりする。『蛮語箋』の段階では、「リンネン」はまだ外来語でない。

ＯＥＤの bridge（名詞）1に引かれる最古の用例はやはり対訳辞書であって、その形式は次のとおりである。

c **1000** ÆLFRIC *Gram.* ix. § 39(Z.) 63 *Hic pons,* þeos brycg [*v.r.* brigc].(3)

これは羅英対訳辞書であるから、同じ対訳辞書でも『蛮語箋』のばあいとは事情が逆である。ＯＥＤのばあい brigc は積極的な引用になりうる。

といったようなことを研究者が確認してかからないと状況を根本的に誤認してしまうことになりかねない。

対訳辞書・語学書などからの引用については慎重に読まなければならないと思った。

（注）

（1）引用には文献名だけの引用と、用例つきの引用と両方ある。数から言えば前者が多い。

（2）旧版の自序で例数5～6万と著者がのべたのは、passim も含んでの延べ数である。一出典一引用と見なしてかぞえなすと、旧版での引用数は三万程度と推定される（一ページに三十以上の出典数を持つページはほとんどないから）。これに対して新版での追加は、同じ規準で約二万。結局新版での引用はすべてで五万五千前後らしい。

（3）brycg は bridge の古形。なお古形はＯＥＤに見出しとしてはいっさい出ていない。このことからＯＥＤの基本的性格は現代語辞書であることがわかる。ＯＥＤの歴史主義とは、現代語形の歴史を明らかにするという意味であって、古語も見出しにのせるという意味ではない。

五

次に見出しについて観察してみる。

いったい外来語といっても、一般外来語、専門外来語といろいろあるが、中でも次の三つは特殊なものである。

生活外来語
商業外来語
文化外来語

識者が非難・攻撃する外来語は右の三つのうち商業外来語に属するものである（広告、服飾、化粧品、百貨店など）。

生活外来語とは、「ホイル」(foil)「ポリバケツ」「カリフラ」(cauliflower)「ポロねぎ」(poireau) などのたぐいであるが、これはどんなに新作されても、だれも問題にしない。

文化外来語とは、たとえば「オブリゲーション」(obligation)「パブリケーション」(publication)「ペンディング」などのたぐいであるが、これは外来語をあげつらうかたがたの用語そのものであるために、盲点にはいっている。

私の好みから言えば、前述の特殊な外来語を見出しに多くとりあげていただきたいのであるが、さいわいにその希望はかなえられ、特に風俗外来語とでも称すべき語はかなり特殊なものまで幅広く収められている（コイトゥス、張りバタ、とんでもハップン）。

見出しの選定が終わったら問題となるのは、語形のゆれおよび表記ちがいである。著者は「原則として、それらの中から1つだけ選んで見出し語とした」（「凡例」9ページ）が、ひとつだけを選ぶことがその他の形をまったく無視することになるのかどうか。

たとえば「レクリエーション」については次のいろいろの形がある。

リクリエーション（本書あり）
リクレーション（東京都中央区馬喰町町内会掲示64年11月5日所見）
レクリエーション（本書あり）
レクリェーション（札幌市丸山公園掲示66年9月25日撮影）
レクレーション（『週刊文春』65年4月19日号104）

本書には登録されていないが最近使われ始めた「エグゼクティブ」にしても、次のように「エクゼキューティブ」「エクゼクチブ」「エクセクティブ」「エクゼクティブ」「エグゼクティブ」の各語形が入り乱れている。

「パーティー」（本書）に対しては、「パーティ」（獅子文六『自由学校』50年など）の表記形式が流行し、「パンティ」（本書）には「パンティー」が目につく、といった調子である。著者は、語形のゆれや表記ちがいに対してはひじょうな苦心を払い、妥当な方針を立てているが、できるだけ引用例の中に、見出しにもれた語形や表記を明示することにすれば利用価値がさらに高まったであろう。(2)

見出し語のなかで一種目に立つものは混種語である。著者は複合語も広く採録する方針をとったので、「ガス焜炉」「パン学問」「羽まだら蚊」「大仏」「魔法壜」なども見出し語に立っている。「嘔吐をもよおすほどいとわしい」嫌悪の情にたえて「アメション」「パンマ」など日本語のある種の現状を「如実に、綿密に」記録した著者の努力は、時のたつと共に本書に資料としての価値をますます与えるであろう。

（注）

（1）「オブリゲーション」は、二つの研究機関に所属する、数人の人から耳にした。「パブリケーション」は、ある研究機関に所属する人から耳にした。口をついて言われるぐあいからして、これらの語はその人人にとって常用語であるように察せられた。このように外来語のなかには、口頭語によくあらわれて、書記語には現われにくいものがあるようである。

（2）小さなことだが、「パーチクル＝パーティクル」のところで一例は「小片（パーチクル）」とあるが、他の三例は書名だけである。この見出しは、旧版では「パーティクル」であった。旧版の用例「パーチクル」は、見出し「パーティクル」と一致しないがゆえにあえて示したのだとすれば、新版ではそのへんの関係が逆に受け取られることになりそうである。

六

用例が辞書の生命であるということの一つの意味は、豊富な用例があれば、それを手がかりにしてくわしい意味の記述ができるということである。記述とは、単にありうる意味の記述や、ありそうな意味の中の若干の記述ではなく、現にある意味のすべてを客観的に記述する、ということである。本書の意味の記述は、同音語の豊富な収集とならんで、まことに精細をきわめる。

「ショート」の意味は『広辞苑』によれば三つある。本書は①から⑦までを区別していちいち用例を示す。「オープン」の意味は『新潮国語辞典』によれば七つある。本書は①から⑨までを区別するが、⑥は三義に細分されるので計十一義を区別したことになる。中でも「①開く。店開きする。」を用例から帰納しえたことは大きな功績であった。

外来語の語釈で注意しなければならないことは、対訳辞書の引き写しに終わってはいけないということである。これまでの国語辞書の語釈の㊀あたりには、とかくこの種の引き写しらしい意味——現にある意味ではなく、ありうる意味もしくはありそうな意味——が書かれていた。前記「ショート」について言えば諸辞書おおむね「㊀短い。」とある。つまり「ショート」に自立語としての用法があることを認めているかのごとくである。しかし、㊀の意味の「ショート」が常に「ショートカット〔髪型〕」「ショートスカート」などの前部分としてだけ使われるのだとすれば、「短い」の語釈のところでそれをことわるか、または造語成分「ショート」を認めるか、もしくは、「ショートスカート」「ショートヘア」などの形で直接見出しに立てるべきである。本書は「ハンド」[1]の例などでわかるようにおおむね賢明な処理をしているが、「ショート」のばあいは、多少対訳辞書的である。「①短い。↕ロング。」を支持する用例があがっていない。「ストレート」の「①まっすぐな。一直線の。」も同様である。こういうときの意味こそ、支持する用例がほしかった。

次に国語辞書の立ち場から言うと、見出し語の品詞的取り扱いについて若干感想がある。たとえば「ビューティフル」「ワンダフル」などは、引用例が短いので、日本語として使っているのか外国語として使っているのかもよくわからない。日本語として使っているとしても、名詞なのか、感動詞なのか、形容動詞なのかはっきりしない。「素敵だ、ワンダフルだ、ブラヴォー」の用例はその点はっきりした用例でありがたい。

「コミュニケート」「コミュニケーション」についても似たようなことがある。本書では前者に「コミュニケートする」、後者に「コミュニケーションは」などの用例を引く。しかし実例によると、往往「コミュニケートが」「コミュニケーションする」などの用法にぶつかる。たとえば、

コミュニケートを失った女と男（『週刊朝日』64年8月21日号116）

どの程度、弁士〔立ち会い演説の〕の人間が自分〔聞き手〕に誠実さをコミュニケーションしたか（『読売新聞』63年11月18日夕刊9）

名詞「ショック」についても週刊誌などではさかんに「ショックな○○」とやる。

〜というショックな事実があきらかになった。（『週刊明星』63年11月10日号90）

こんなのはすべて純正な国語でないとして無視するのも一見識で

あるが、本書のばあいは、用法のこのような広がりにまで注目して取り上げていただけるとありがたい。それを手がかりとして品詞性の考察も有効に行なわれるであろう。

原語の取り扱いについては、本書の立ち場は多元説である。「外来語の多くは世界共通のものが多いので、しいて一国語から借用したとすることはかえって誤りと思われるものも多い」（「凡例」7ページ。傍点は見坊）からである。「このばあい、原語多元説をたてて、いくつか並記した。」（同上。傍点は見坊）

原語多元説は、本書の特色の大きな一つである。たとえば「ガス」については、『日本外来語辞典』は英語説、魚返善雄『外来語小辞典』楳垣実『外来語辞典』はオランダ語・英語説であるのに対して、本書はオランダ語・英語・ドイツ語・ポルトガル語の四つを並記する。ガスを前要素に持つ複合語は四十五語あるが、これはいくつかの例外を除き全部英語としている。[2]（外来語の原語についての考え方、原語と語源との関係などについては、荒川惣兵衛「外来語あれこれ」（『言語生活』68年12月）に、本書「凡例」の趣旨が布衍されていてわかりやすい）

そのほか、「キロ」「カスタリア〔ギリシャ神話〕」などのように、ヨーロッパでは同じつづりになるものに対しては原語名を「欧」としている。

キロ【(ギリシア>フランス>)欧 Kilo】[3]

カスタリア【ギリシア>ラテ>英, 欧 Castalia】

（凡例では、英、米、……梵、欧の次に「和」とあるが、これは和製外来語の意味で、他の原語名とは性質がちがう）

「エスカレート」については楳垣実『外来語辞典』は escalator から来たとする（「エスカレーション」の項）が著者は escalate のつづりを上げながらも、「米か和?」ときわめて慎重である。[4] 語源に関しても escalade+operate とまた一説を立てている。しかし、この辺の正否の判定や欠所の補充に関してはまったく無能力であることを悲しむ。

原語の指示・決定に関しては考えるべきことがいろいろあるようである。条件を明らかにしてかからないと利用者は、五里霧中に迷うということもありそうである。

「ファンファーレ」の原語として本書は

「ドイ, 英 fanfare」とする。ドイツ語の名詞形ならば Fanfare とあるはず、といったこまかな問題は別として、英語 fanfare〔fǽnfeər〕[5]が原語となるためには、ひとつの条件——綴りのローマ字風読み——をくわえることが必要である。親切のためには、原語としての正しい発音を示し、かつ「○○の転」「○○のローマ字式読み」などの注記がありたい。

右はひとつの条件である。このほかにもいろいろあるかもしれない。明治初期 reader を「リードル」といったのはどういう条件がはたらいたのか、そのようなことも含めて今後の外来語研究者が明らかにすべき課題が本書には隠されているように思う。

（注）

（1） 本書「ハンド」の項に「①手。」という語釈はない。「手」の意味の「ハンド」はすべて「ハンドクリーム」「マジックハンド」など複合語の一要素としてだけ現われるように思われる。

（2）例外は「ガス糸（いと）」（オランダ語）、「ガスタンク」（米語）、「ガス灯」（オランダ語）、「ガスメーター」（独・英）、「ガスランプ」（オランダ語）の五語。

（3）（　）は間接の原語＝祖語、姉妹関係にあるものを示す記号であるが、「（」の終わりがどこであるか不明。あるいは「（ギリシア＞ラテン）」のつもりか。

（4）escalator に由来する escalate はウェブスターの第二版にも出ているが、戦争の場合の意味用法は同書第三版にもない。この意味が出ているのは、たとえば Random House Dictionary (1967) である。同書 escalate の**1**の例文は *to escalate a war* である。**2**は在来の意味である。ランダムハウスには escalation も出ている。

なお本書「エスカレーション」に反対語「デスカレーション」の指示がありながら、その見出しがないなど形式上の不備はまま見受けられるが、今はいっさいふれない。

（5）研究社『新ポケット英和辞典』改訂新版による。（ついでに、petit ROBERT (1967) の語源解によれば、fanfare は一五三二年出版の一書名に由来するもののよし）

七

外来語といえばとかく新語・流行語と同一視する向きが多い。しかし外来語の世界は広く豊かであり、歴史の厚みも十分ある。また世人が攻撃する外来語は、外来語の全領域のほんの一部である。外来語の世界をいろいろの層に分けて考えると、ひとつの小宇宙が形成されているような思いがする。本書を批評する足場を組み立てるために私は勝手な用語をこしらえたが、その間つぎつぎと新しい展望が開け、もうわかっていると思っていたことがらの中に解決を待つ広い領域、数多くの個別的問題が残っていることに気がついた。しかしながら外来語の個別的研究の成果は貧弱をきわめている。本書は外来語研究の現状を前進させるためにもきわめて重要な手がかりとなるであろう。

外来語といえばなぜ興味本位の手軽な読み物しか期待しないのか。新語・流行語でさえその由来と日付けなどを明らかにしようと思ったら、一ページのコラムなどですむものではない。（「ナイター」の由来をつきとめた上野景福教授の努力を見よ。）本書は外来語というものが余りにも手軽に片づけられ、「まじめな学問」（「凡例」5ページ）の対象とならないことに対する抗議の書とも言える。本書においてはじめて採録された語、本書においてはじめて発見・是正された原語、本書においてはじめて記述された意味はどのページにも充満している。いわんや引用文献に至っては大部分が本書において日の目を見たと言ってよい（記録されない用例は用例でない）。実に本書は著者の血と汗の結晶である。

本書を評するに当たり、私は終始著者の多力に対しておのれの非力を嘆じ、著者の多識に対しておのれの無識を恥じた。見当はずれの盲言に終始したことを恐れ、著者の寛容をいのり、「大衆への奉仕」を「現代最高のモラルと信じる」（「はじめに」3ページ）著者に最大の敬意をはらいつつペンを置く。

―前国立国語研究所員―